ステディ

高木　登

第七稿

12/27/20

登場人物

小林圭吾　ライター。木崎の恋人。

木崎逸郎　アルバイト。小林の恋人。

新井みずき　木崎と一度だけ寝た女。

白石由希乃　編集者。

以上

あるマンションの一室。
そこは、小林圭吾の住まいである。

リビング。

大きなダブルベッドが一台。

部屋の中央にテーブルが一台。

下手奥に玄関、キッチン、ユニットバスがある。

上手奥は別室で小林の仕事部屋になっており、自宅電話機も備えてあるらしい。ともに舞台上からは見えない。

ある日曜の午後。

場内、ふいに明るくなる。

ベッドに男が寝ている。

木崎逸郎である。

時折かすかに身を動かす。熟睡している。

立ち尽くし、それを見ている男。

小林圭吾である。

じっと木崎の寝相を見ている。

小林　……。

起きそうにない。

チャイムが鳴る。

小林　（顔を上げ）……。

チャイム、続けざまに幾度も幾度も鳴る。

ややヒステリックな様相。

小林　……。（ため息）

そのまま玄関に向かう小林。

やがて新井みずきが入ってくる。

新井　（小林をにらむように見て）……。

小林　寝てるよ。

新井　見ればわかります。

小林　じゃあ、すわったら？

新井　え？

小林　すわんなよ。

新井　なんで？　なにが、「じゃあ」なの？　寝てるってわかったら、なんですわんなくちゃいけないの？

小林　じゃあ、立ってなよ。

新井　（その場にすわる）

小林　（見て、ため息）

気まずい沈黙。

小林、なんとなくベッドに腰をおろす。

新井　なんですか？

小林　え？

新井　なんか、感じ悪いなと思って。

小林　どうして。

新井　なんで、そんなとこにすわるんですか？

小林　べつに意味はないけど。

新井　ありますよ。わかってるんだから。（自信たっぷりに）あな

たがそこにすわったっていうことは、ようするにわたしに対する脅迫なんですよ。

小林　脅迫。

新井　わたしに彼をとられるんじゃないかって怯えてるんですよ。だからですよ。

小林　……そうですか。

新井　……なんなんですか？　「そうですか」って、どういうことですか？

小林　どういうことって……そういうことだけど。

新井　すごく感じ悪いと思うんですけど。頭に来たなら、そう言えばいいじゃないですか。なんで「そうですか」とか言ってやりすごすんですか？　わたしのことバカにしてるからそんな言い方するんじゃないんですか？

小林　あのさ、

新井　なんですか？

小林　なんでそう絡むんだよ。

新井　絡むってなんですか。

小林　あの……いちいち言葉尻をとるっていうか、

新井　コトバジリ？　なに言ってんだかわかんないわ、もっとわかるように言ってください。

小林　……なんつうかさ、言葉を知らないのは、きみの方なわけだろ、なんでそんなにえらそうにできるわけ？

新井　ほら、やっぱりバカにして。

小林　バカにはしてないよ、

新井　してるじゃないですか、

小林　してないよ。ちょっと呆れてるだけだよ。

新井　……ひどい。

小林　なにが、

新井　わたし、「呆れた」なんて人に言われたことないし。
小林　じゃあ、言われないような努力をしようよ。日本語知らないのに開き直って、エラそうな態度とるのやめようよ。
新井　……わかった。すんごくよくわかった。
小林　なにが？
新井　なんであなたがわたしに嫌がらせしたがるのか。焦ってるのね。
小林　は？
新井　なんだかんだ言っても焦ってるのよ。だからでしょう？
小林　あのね、
新井　いいですよ、無理に反論しなくても。もうわかっちゃいましたから、あなたの底の浅さが。

自信たっぷりな態度だが、決して小林と目は合わさない新井。

小林、ため息ついて立ち上がり、キッチンに去る。

新井　……（小林の退場を待ち、小声で）ちょっと！（と、寝ている木崎を揺り動かす）
木崎　（起きない）
新井　ねえ！（小声ではあるが、ヒステリックに激しく）
木崎　（やや身を動かす）
新井　（立ち上がり、枕を引きずり取って、それで木崎を激しく殴りつける）
木崎　（さすがに目覚めた様子）
新井　（見下ろし）……。
木崎　（半身を起こし、ぼうっとしている）

新井　……。（もういちど枕を木崎の頭頂に思いきり振り下ろす）
木崎　（されるがままだが）……。
新井　……。
木崎　……なんでいるの？
新井　来ちゃった。
木崎　……そう。
新井　遅かったの？
木崎　なにが？
新井　寝るの。
木崎　いや……そうでもないけど。
新井　もう一時だけど。
木崎　ん……でも、日曜だし。
新井　起きてよ。
木崎　起きてるよ。
新井　もっと、ちゃんと起きてよ。
木崎　ああ……起きるよ。（と、欠伸しながら、ベッドに腰掛ける）
新井　……ねえ。
木崎　ん？
新井　したの？
木崎　なにを？
新井　あの人と。
木崎　ああ……べつに。
新井　べつにって、なに？
木崎　昨日はしてないけど。
新井　じゃあ、いつしたの？
木崎　……一昨日の昼間じゃないかな。
新井　昼間？
木崎　うん、

新井　一昨日って、金曜日じゃない。ゆるせない、わたし仕事してたのよ、
木崎　……ああ。
新井　なんでするかな？　どうして昼間になんかするの？
木崎　俺、バイト夜だし、小林さんはああいう仕事だから……。
新井　とにかく、これからは平日の昼間にするのはやめて。
木崎　なんだよ、それ。じゃあ、夜だったらいいのかよ。
新井　（うなずいて、けろっと）邪魔できるから。

小林、ヴィッテルの五〇〇ミリサイズを飲みながら戻ってくる。

小林　（新井を示し）お客さん。
木崎　わかってるよ。
小林　何度もいらしてたんだ。おまえがいないとき。
木崎　聞いたよ、本人から。
小林　（軽くうなずき）じゃあ、俺、出てるから。
木崎　うん。
小林　（微笑して出ていこうとするが）
新井　逃げるんですか？　逃げるんでしょ？　出てくなんて。
小林　（止まり）……なんで俺が逃げる理由があんの？
新井　逃げてるじゃない。そんなにわたしが怖いんですか？
木崎　（新井に）気ぃつかってくれてんだよ。
新井　え？
木崎　俺らに気ぃつかってくれてんだよ。ふたりでゆっくり話ができるようにってさ。
新井　なんで出てくのが気をつかってることになるの？　ふたりでゆっくり話ができるようにって、なんでそういうことにな

るの？　わたし、この人がいるとちゃんとした話ができないってこと？　なんでわたしがこの人に哀れまれなくちゃなんないの？

木崎　そうじゃねえだろ、

新井　そういうことじゃないの、

木崎　なんでそんな風にさ、悪く悪く解釈すんだよ、

新井　この人がさっきからわたしに意地悪なことばっかり言うからじゃない、

小林　わかったよ。いるよ。ずっといる。

木崎　小林さん、

小林　気にすんな。べつに用事があるわけじゃなし。

新井　（決して小林の方は見ず）なにその態度。偉そうに。

小林・木崎　（一瞬、顔見合わせ）……。

新井　ねえ、どっか出かけようよ、いい天気なんだしさ、こんな男臭い部屋にこもってないで、ふたりで出かけようよ。

小林　（もうどうでもいいといった顔）

木崎　ねえ、新井さん、

新井　（聞かず）どこでもいいから、ねえ、

木崎　新井さん、

新井　ここらへん歩くだけでもいいから、行こうよ、ねえ、

木崎　（冷たく）聞けよ。

新井　……。

木崎　はっきり言うけどさ、俺も彼も迷惑してんだよ。休みの日にいきなり押し掛けて来てさ、しかもこれで五回目だろ？

新井　六回目。

木崎　……六回目で、小林さんはいちおうきみを大切にしてるのに、きみは彼にすげえ失礼な態度でさ、

新井　（さえぎり）失礼なのは、この人でしょう？

木崎　きみだよ、
新井　この人よ！（と、木崎の顔面を張り倒す）
木崎　（顔を押さえて横に倒れる）
小林　（寄って来て）おい、なにすんだ！
新井　近寄んないでよ！（と、小林を突き倒す）
小林　（よろめき倒れ）
木崎　（顔を押さえながら）いきなりなにすんだよ、
新井　バカにするから。あんたが悪いんだからね、
木崎　なんでも悪いのは相手かよ、
新井　わたし、なんにも悪いことしてないじゃない、
小林　（立ち上がり）してるだろ、
新井　（さえぎり、大声で）してません！
小林　（さすがに頭に来て、怒鳴り）してるだろうが！
新井　……（呆然と）怖い。
小林・木崎　……。
新井　（木崎に）聞いた？　わたしのこと怒鳴りつけたのよ。
木崎　（答える気にもなれず）……。
新井　こんな乱暴な人とは別れてよ。女に向かって怒鳴りつけてくるような人とは別れてよ！　こんな人のなにがいいのよ。この先つきあっててなにかいいことある？　なんにもないじゃない、
木崎　……なあ、
新井　（さえぎり）こんなのまともじゃないじゃない。男同士でつきあってるなんて、ふつうじゃないじゃない。それに、よりにもよってこんな人じゃない、別れてよ、もう、いいかげん、こんな人とは、別れてよ！
木崎　（怒鳴って）もうよせよ！
新井　――。

木崎　（落ち着いて）ほんっともうしわけないんだけどさ、きみよりもずっと大事な人なんだよね、俺にとってはさ。俺のこと、少しでも好きでいてくれるんならさ、彼のこともっと大事にしてくれないと。

新井　……なんでそんなに自分勝手なことばっかり言えるの？　あなた、わたしの気持ち考えたことある？　わたし、あなたを幸せにすることしか考えてないのよ。頼まれもしないのに、あなたのこと好きだって言うだけで、それだけであなたのことしか考えてないのよ、それなのになんであなたは勝手なことばっかり言って、わたしを困らせるの？

木崎　……新井さんはさ、疲れてるんだよ。

新井　……どういう意味？

木崎　帰って休んだら？

新井　どういう意味よ！

木崎　（冷たく）帰れ。うぜえよ。

新井　……。

新井、小林をわざと押し退けるようにして退場。

小林　いいのかよ。

木崎　いいんじゃない？（と、ふたたび寝る）

小林　また来んぞ。

木崎　（寝たまま）上げなきゃいいのに。

小林　騒ぐんだ。廊下で。ホモとか、死ねとか。

木崎　警察呼べば。

小林　呼べるかよ、めんどくせえぞ。

木崎　いいじゃん。

小林　よくねえよ。

木崎　どうせカミングアウトしてんだからさ。
小林　大家に黙ってるのに警察に言うのかよ。
木崎　いっそそうしちゃった方が気楽なんじゃないの？
小林　ガキみたいなこと言うな。大人になれよ、大人に。

仕事部屋から電話が鳴る。

退場して、出る小林。

小林　はい、もしもし。もしもし？
木崎　（様子を気にして）……。
小林　もしもし。もしもーし。（出てきて）切れた。
木崎　やることがわかりやすいよね。
小林　絵に描いたような（ストーカーだなと言おうとしたところで電話がふたたび鳴り）……。

ふたたび仕事部屋に向かう。

小林　もしもし？　……切れた。（と、出てくる）

身を起こし、仕事部屋に向かう木崎。

すぐに出てきて、

木崎　抜いときなよ。
小林　……もうすこし厳しくしときゃよかったかな。
木崎　（ベッドに横になりつつ）そうだよ。家にあげちゃうなんて優しすぎだって。

小林　そうじゃなくて、おまえにさ。
木崎　俺？　どうして？
小林　どうしてじゃないだろ。浮気だろ。
木崎　浮気じゃないよ。
小林　浮気だろう。
木崎　ちがうよ。だって、俺、いちおうつきあってるのは小林さんなわけでさ、それってようするにそういうことじゃん。だったら女の人と寝るっていうのはさ、浮気とかなんとかいう以前の問題なわけじゃない。
小林　なんで。
木崎　だって、

携帯電話の鳴る音。

取り出して、確認する木崎。

ややあって、呼び出し音が止まる。

小林　あの子か？
木崎　非通知になってた。バレバレだっつうの……なんだっけ？
小林　あの子と寝たのは浮気かどうかって話だよ。
木崎　ああ、だから浮気じゃないんだって。
小林　じゃあ、なんなんだよ。
木崎　セックスだよ。
小林　いっしょだろ、
木崎　いっしょじゃねえよ、
小林　つきあってる人間以外とセックスしたら、そりゃ浮気だろうが、

木崎　男と寝たらそうだけど、
小林　男じゃなくたってそうだろう、
木崎　ちがうって、
小林　おまえさ、俺を大事に思ってるっつったよな？　俺ももういい歳だからぎゃあぎゃあ言わないけどさ、はっきり言っておもしろくないよ、この一件は。
木崎　そうなの？
小林　そうなのじゃねえよ、
木崎　だって、俺は小林さんが好きだって言ってるし、別れるつもりもないって言ってるじゃん。
小林　言ってりゃいいのかよ、
木崎　だったらどうして欲しいんだよ。他の誰とも寝て欲しくないとか？
小林　……そこまでは言わねえよ。
木崎　大人。
小林　大人だからな。
木崎　でもさ、だったらべつに文句はないわけじゃん。
小林　あるよ。こっちも大人の態度なんだから、おまえも大人んなってくれよ。
木崎　俺、そんな子供っぽいこと言ってる？
小林　子供っぽくはないが、大人っぽくもないな。
木崎　小林さんのことも大切だけどさ、だからって人生捨てて尽くす気にはなれないわけよ。
小林　そりゃわかるよ、俺だっておまえをそこまで縛る気はねえよ。
木崎　わかるんだったら平気なんじゃないの？
小林　平気じゃねえよ、
木崎　だったらわかってないんだよ、
小林　かもな、

木崎　どっちだよ、
小林　おまえは俺に対してもうしわけないとかぜんぜん思ってないのか？
木崎　あんなのと寝たのは失敗だったと思ってるよ。
小林　そういう言い方はないんじゃないのか？
木崎　あんなのに気ぃ遣えっての？
小林　おまえが相手にしてなけりゃ、ああはならなかったわけだろ？
木崎　小林さん、優しいね、
小林　そうじゃない、
木崎　優しいよ、
小林　おまえが冷たすぎるんだよ、
木崎　そんなことねえよ、
小林　ある、
木崎　小林さん、あいつに同情してんの？
小林　べつに、
木崎　じゃあなんでそんなに俺のこと責めんの？
小林　世の中、割り切れる人間だけじゃないんだってことをさ、わかってほしいと思ってるわけ。
木崎　バカに合わせろってこと？
小林　たまにはな。
木崎　……わかんねえや。（と立ち上がり、別室へ）
小林　……（声をかけ）出かけんのか。
木崎の声　ああ。
小林　どこへ。
木崎の声　わかんない。

木崎、着替えているようだ。

小林　今晩、帰ってくんのか。
木崎の声　たぶん。
小林　誰といっしょだ？
木崎　（顔を出して）さあ。

木崎、退場。

小林　（しばらく玄関を見つめ）……。

ガンと拳で激しく壁を打ちすえる。

ベッドに雑に腰掛ける小林。

木崎が忘れていった携帯に気づく。

ふいにそれが鳴る。

出る小林。

小林　もしもし？　もしもし？

反応がない。

小林　奴なら出かけたぜ。

切る小林。

すかさず鳴り出す。

小林　（出て）出かけたって言ってんだろう！（と、切る）

すかさず鳴り出す。

出ようとしたところで着信音が止まる。

小林　（うんざりとして）……。

今度はキッチンの方で別の着信音が鳴り出す。

そちらへ向かう小林。

しばらく後、着信音が止まり、

小林　俺の携帯の番号までどうやって調べたんだ！

しばし聞いて、

小林　……あ、悪い……いやそういうわけじゃなくて……うん……ああ……いや、ほんとに（笑い）……ああ、かまわないけど……ほんとに？　いいよ、遠慮しないで……いま？　ひとり……だからそうじゃないんだってば（笑い）……うん……それじゃ待ってますから……はい、それじゃ……（切る）

小林、テーブルの上に二機の携帯を置くと、散らかった部屋の整頓をはじめる。

ふいにチャイムが鳴る。

玄関へ向かう。

やがて白石由季乃が入ってくる。

白石　おはようございます。
小林　おはよう。ほんとに早かったね。
白石　だって、ほんとに下にいたんですもん。
小林　言ってくれりゃ、取りにいったのにさ。
白石　お邪魔します。

腰を下ろす白石。

小林、ヴィッテルを持ってきて白石に渡す。

白石　あんな小林さんはじめてですよ。
小林　やめてくれよ、
白石　男相手にあんな言い方しませんもんね。
小林　（微苦笑して）……木崎の女でさ。一回だけらしいんだけど、なんかしつこくて、もう何度もここに押し掛けて来てるんだよね。
白石　彼、バイですか？
小林　本人はゲイだって言い張ってんだよ。セックスと本気はちがうんだと。恋愛の対象はあくまで男なんだと。女とはただのセックスなんだと。だから男と寝たら浮気だけど、女とだったらそうじゃないんだと。

白石　フェミニストには聞かせらんない話ですね、
小林　ほんとだよ、
白石　でも、とりあえず小林さんは安泰じゃないですか。
小林　安泰かよ、これが。
白石　本気だって言われてるだけ良いですよ。
小林　だからさあ、怒りたいんだけど怒りきれないんだよね。その女の子も、迷惑っていうか、なんかお気の毒だし。
白石　おたがい別れる気はないわけでしょ？
小林　うん……。
白石　じゃあ、いいじゃないですか。あとは相手の女のひとだけじゃないですか。木崎君がつれなくしてれば、そのうちあきらめますよ。
小林　ならいいんだけどねえ。
白石　（小林の鬱屈を断ち切るように）見ます？

と、カバンのなかから一冊の雑誌を取り出す白石。

受け取る小林。

小林　（見て）相変わらずいいねえ、市川さんの表紙。
白石　今回は特に気合い入ってるみたいですから。
小林　もっと営業かけたら。
白石　直販だとやっぱり限界がありますよ。一般の書店さんはぜんぜんだし、大書店でも三省堂とか紀伊国屋は目立ったところに置いてくれないし。
小林　まあ、ぜんぜん扱ってくれないよりはいいでしょ。俺もこないだ婦人公論から原稿の依頼来たし。ゲイカップルの現実について書いてくれってさ。それもまあ、これ読んで呼んでく

れたわけだからさ、

白石　木崎君とのこと書くんですか。

小林　赤裸々に書いてやろうかと思ってさ、ぼくの彼はゲイですが女性とのセックスもやめようとしません、一途なぼくは年中やきもきさせられています、

白石　（ややうんざりと）……その彼は？

小林　留守。あいつはいつもそうだよ、ふっと二三日いなくなるだ。

白石　ちょっと残念。

小林　なんで？

白石　見たかったんですよね。

小林　どういうこと？

白石　だって、彼、綺麗じゃないですか。

小林　なんだよ、それ、

白石　目の保養ですよ。

小林　見世物みたいに言うなよ。

白石　高校生くらいのときに木崎君みたいな子と出会ってたら、ビアンじゃなくなってたかもしれませんね。

小林　そんなもんかね。

白石　ひょっとして自分がビアンだってことにも気づかなかったかもしれないですね。なんていうか、訴求力ありますよ、木崎君のルックスは。

小林　（微苦笑）……。

突然、ガンガンとドアを叩く音。

小林　（白石の顔を見て）……。

白石　（小林を見て）……。

激しいノックがつづく。

うるさい。

小林　……。

白石　なんですか？

小林　例の。（と、立ち上がり、玄関へ）

白石　（見ている）

小林、ドアを開け、新井を中に入れる。

礼も言わずにどかどかと上がり込んでくる新井。

ぽかんとした白石の顔を見て、

新井　いやらしい……彼の留守中に女上げたりして。

白石　は？

新井　（小林に）これでわかりましたよ。あなた、彼が好きだなんて嘘じゃないですか。彼のこと、騙してたんじゃないですか。最悪。

白石　……あの。

新井　（無視し）待たせてもらいますから。（と、ダイニングの椅子に腰掛ける）

白石　……。

新井、決して小林や白石とは目を合わそうとしない。

鞄を抱きかかえるようにして、うつむき加減に、固まるようにして、椅子にすわっている。

小林　なあ。俺はいいよ。あんたにいろいろ言われても仕方がないと思うけどさ、この人はちがうだろ？

白石　（ふたりの様子を見ている）

小林　やめてくれよ。この人のことを悪く言うのはさ。編集の人なんだよ。雑誌の。俺の担当の。それだけなんだからさ。なにか言いたいことがあるなら俺だけにしてくれよ。わかったな？

新井　バカみたい。必死に言い訳しちゃって。

小林　……。（ため息ついて、自分も椅子にすわる）

小林と新井と白石。

白石　……（小林に）ちょっと。なんなんですか、これ。このままにしとくの？

小林　ああ、そのうちあきらめて帰るよ。こないだもそうだったし。

白石　そういう問題ですか？

小林　しょうがないだろ、ほかに、どうしろっての？

白石　なにかあったらどうするつもりなんですか？

小林　とにかく俺と木崎の問題だからさ、あんまり外に出したくないんだよ。それにいろいろ話してれば、この人にも通じるかもしれないしさ。

白石　呆れた。

小林　平気だよ。なにをするってわけでもないし、

白石　小林さん、人が良すぎますよ、

小林　そんなことないって、

新井　（割って入り）喧嘩なら表でやってくれませんか。みっともないですよ、人前で。
白石　……小林さん。はっきりさせましょうよ。木崎君の問題なわけでしょ？　だったら木崎君に決着つけてもらいましょうよ。
小林　あいつなりに努力はしてるんだよ、
白石　その結果がこれですか？　電話してください。木崎君に、今すぐ。携帯ぐらい持ってるんでしょ？　呼び戻してください。
小林　なにも今日いきなりじゃなくたって……。
白石　じゃあ、いつだったらいいんですか？
小林　だから、いつか……。
白石　それ、今日にしましょ。
小林　（木崎の携帯を取って）……忘れてった。
白石　心当たりは？
小林　たぶん渋谷あたりじゃねえかな。
白石　お店とか。
小林　（首を振る）
白石　放任主義なんですね。
小林　（微苦笑）……。
白石　まあ、いいわ。待ちましょう。
小林　白石さんさ、いいよ帰って。これ、白石さん巻き込んでもしょうがないことなんで。
白石　今わたしが帰って、小林さんとこの人だけになっても、たぶんなんにも変らないですよね。
小林　（苦笑）……。
白石　それに、なにかあったときにふたりきりじゃまずいんじゃないですか。
新井　（さえぎって）いいかげんにしてくれませんか。さっきから

黙って聞いてれば、彼の意志なんかおかまいなしに帰るとか帰らないとか、いるとかいないとか、わたしのことバカにするのやめてくれませんか？

小林　バカになんかしてないよ、

新井　してます。

小林　してないよ。君がちゃんと人の話を聞いてくれないから……

新井　（さえぎって）わたしの話を聞いてくれないのは、あなたたちじゃないんですか？

小林　そんなことないよ。聞くよ。聞いてるよ。

新井　だったら、ここから出てってください。彼と別れて。今すぐに！

小林　なんでそうなるんだよ、

新井　わたしの話聞くって言ったでしょう？

小林　だからさ、

白石　話し聞けってことは、言うこと聞けってこと？

新井　（無視し、小林に）言った通りにしてよ！

小林　こっちの話も聞いてくれよ、

新井　わたしの話を聞いてよ！

白石　人の話を聞きなさい！

新井　そうよ！　勝手なことばっかり言って！

一同、沈黙。

小林　……メシでも食べないか？　（キッチンに向かって）カレー作ったんだ。

新井　彼の留守中に勝手に食事するんですか。

小林　ああ。ここは俺の家だからね。

新井　図々しい。

小林、キッチンに去る。

白石　（新井に）ちょっと。

新井　（無視）

白石　ちょっと、あなた。（新井の袖を引き）聞きなさいよ。

新井　（振り払い）なにするんですか？

白石　あなた、自分がなにやってるのかわかってるんでしょう？

新井　あなたみたいな汚らわしい人と口利きたくありません。

白石　は？

新井　あんな人と寝るなんて、信じらんない。

白石　あなた、さっき小林さんが言ったこと、聞いてなかったの？わたし、レズビアンで、もう十年以上男の人とセックスなんかしてませんよ。

新井　いいんですよ、そんな言い訳しなくても。わかってますから。あんな人庇ったりして。みっともないっていうか、見苦しいっていうか。とにかくやめてください。あなたみたいなみじめな人とかかわりあいになりたくないんです。

白石　（やってられないという顔で）……。

小林、あらためてヴィッテルを持ってくる。

白石　……前から聞きたかったんですけど。

小林　ん？

白石　なんでリビングにベッドが置いてあるんですか。

小林　ああ……とにかくでかいのが欲しくてさ、それでなんかここに置きたくなって。

白石　答んなってないですよ。

小林　あっちよりもこっちの方が広いし、日当たりもいいわけでさ、それで、まあ、こっちに。
白石　こっちにしたかったから、こっちだってことですか。
小林　うん、まあ、そういうこと。
白石　どこに置かなくちゃいけないっていう決まりもないですしねえ。
新井　いやらしい。この人、わたしへのあてつけでこういうことするんですよ。こんなとこへベッド置いたりするのも、わたしがここへ来るようになってからなんですよ。彼のこと好きでもないくせに、彼との関係を見せびらかしたいんですよ。
白石　（本気で反論する気にもなれず、いささかげんなりと）ずっと前からここに置いてあったわよ。
新井　（鼻で笑う）
白石　でも、半分あたってるかも。
新井　（ふっと言葉を失い）……。
白石　たしかにこのベッド見てると、小林さんと木崎君の関係には立ち入れないような気分になりますよね。
小林　そう？
白石　小林さん、家によく、人呼ぶじゃないですか。要は木崎君との関係を……。
新井　（絶叫）
白石　――。
小林　――。
新井　（絶叫をやめ、肩で息をして）……頭がおかしくなりそう。
小林・白石　……。
新井　あんたたちと話してると、頭がおかしくなっちゃう。はやく彼を助け出していっしょに逃げなきゃ。彼までおかしくなっちゃう。（ぶつぶつと早口で）彼が好き、彼が好き、彼が好

き、彼が好き、彼が好き、彼が好き、彼も好き、彼も好き、彼も好き、彼も好き、彼も好き、彼も好き、……、

新井、肩を抱え、あらゆる現実を拒否するかのように身体を丸め、えんえんとそのフレーズを、聞こえるか聞こえないかくらいの声でくりかえす。

小林　（痛ましい目で新井を見ている）

白石　（ただ見ているしかない）

チャイムの音。

新井、ものすごい勢いで立ち上がり玄関へ向かう。

木崎、入ってくる。

木崎　（新井の姿を見て、なにごとかと）……。

新井　（喜色満面に）おかえりなさい！

木崎　（たじろぎ）……た、ただいま。

新井　（じわっと涙がこみ上げて）……（木崎の膝に縋り、わっと泣き崩れる）

新井、木崎の腕にしがみついたまま離れない。

木崎　（白石に）いらっしゃい。

白石　いらっしゃいじゃないわよ。なんとかしなさい。

木崎　なにを？

白石　その子のことよ。こういうことって、木崎君がしっかりしな

いとどうにもならないと思うんだけど。
木崎　なんでそんな白石さんが仕切ってんの？
白石　たまたま来たら、小林さんが不幸なことになってたからよ。
木崎　なんだよ、白石さん関係ねえじゃん、
白石　関係ない人間だから言えることってあんの、
木崎　わかんねえな、
白石　あなた、責任てものを考えたことないの？
木崎　責任？　ない。
白石　こんなことになってんのは、ぜんぶあんたのせいじゃないの。
　ちがう？
木崎　俺、寝るだけの女なんて腐るほどいたけどさ、こんなのこい
　つだけだぜ、
白石　あんた、よく本人の前でそんなこと言えるわね、
木崎　言ったって通じねえもん、（新井に）な？
新井　（だいぶおさまり、何度もうなずく）
木崎　俺のせいじゃないよ。こいつに問題があるんだよ。こいつが
　こんなじゃなけりゃ、こんなことにはなってないんだからさ、
白石　小林さん、この人のことでものすごく消耗してるわけよ。な
　んで彼がそんな思いをしなくちゃなんないの？
木崎　小林さんもさ、割り切ればいいんだよ。こんなの気にする必
　要ないのにさ。なんか必要以上に誠実だしさ、話通じねえの
　に、相手したって仕方ねえのに、
白石　とにかくさ、こんなことになってるのは、ぜんぶあんたのせ
　いなわけよ、
木崎　だからさ、小林さんは気にする必要がないことなんだってば、
　これは、
白石　気にするに決まってるじゃないの。
木崎　だからさ、小林さんがそういう人間になれば済むことじゃん、

白石　そういう人間ってなによ、
木崎　割り切れる人間ってことだよ、
白石　人間て、あんたが考えてるほど単純じゃないの、
木崎　そんなことねえよ、
白石　あります、
木崎　じゃあ、俺はなんなの？　俺はきっちり割り切れてるぜ、
白石　あなたが特別なんでしょ、
木崎　そんなことねえよ。俺、べつに特別でもなんでもねえよ、
白石　ふつうは、気にするもんなの、
木崎　ふつううってなんだよ、
白石　常識ってことよ、
木崎　白石さんたちはさ、ふつうとか常識とか、そういうことをおかしいって言ってきたわけだろ？
白石　セクシュアリティの問題と人間関係の問題をごっちゃにしないでくれる？
木崎　おんなじだよ、
白石　それをいっしょにできんのは、あんたみたいなお子さまだけよ、
木崎　じゃあ、白石さんさ、俺と寝ようよ。
白石　え？
木崎　俺と寝ればわかるよ。俺と小林さんとあんたとあんたの彼女の関係がどうなるのかさ。ふつうとか常識とか言ってる場合じゃないぜ。俺たちだけのルールを探すしかなくなるだろ。人と人との関係はオンリーワンだからさ。俺、そういうの好きなんだよね。その人としか作れない関係ってのを、あっちこっちにいっぱい作っていくのがさ。だから白石さん、俺と寝ようよ。そうすりゃわかるよ。俺と白石さんの関係はこの世にひとつしかないんだってさ。セックスも人間関係も人の

数だけあるんだってさ。セクシュアリティも人間関係もおなじだよ。ふつうや常識超えようよ。超えたつもりじゃなくてさ。

白石　……口の減らない子。

木崎　（ふいに小林に）ねえ。なんとも思わないの？　目の前で女の人口説いてんのに。

小林　ああ……どうせ本気じゃないんだろ。

木崎　（フッと笑う）

白石　小林さん、ものわかりが良すぎるんですよ、

木崎　なんかずっと黙ったまんまだね。

小林　ん……ああ。

木崎　なんで？

小林　いや……なんかギスギスすんのもなんだかなと思って。メシ食べないか、せっかく作ったんだし。

木崎　俺はいいよ。さっきマックで食べてきちゃったから。

小林　そうか。じゃあ、（新井に）きみは？

新井　（反応しない）

小林　……白石さんは？

白石　……。

小林　（立ち上がり、配膳の準備をはじめる）

新井　（ふいに、甘えた声で）ねえ、こんなとこ出ていこうよ。

木崎　行くかよ、

新井　わたし、頭おかしくなっちゃうよ、行こうよ、はやく、

木崎　行かねえよ、

新井　ねえ、

木崎　新井さんさ、俺、ほんとにあんたとつきあう気ないから。

新井　またそういう冗談言って、

木崎　冗談じゃねえよ、本気だよ、

新井　やめてよ、この人たちに気ぃ遣ってわたしに嘘つくの、
木崎　そうじゃねえよ、
新井　脅されてるんでしょ？　警察行って、話聞いてもらおうよ。
木崎　なあ。
新井　あなたのこと、可哀想でこれ以上見てらんないの。

小林、皿に盛ったカレーライスを配っていく。

白石の前に置く。

新井の前に置き、そして自分の分を……というとき、

新井　こんなのいらない。（と、ゴミ箱に無造作に捨てる）

一瞬の間。

木崎　おめえ、なにすんだよ！（と、新井を平手で張り倒す）
新井　なにすんのよ！
木崎　なにすんのじゃねえよ！（と、さらに一発打つ）
小林　（木崎に）おい、
木崎　（小林に）黙っててくれよ。（新井に）おい、おまえ、どういうつもりだよ、これは、
新井　なんなのよ、
木崎　どういうつもりかって聞いてんだよ！（殴る）
新井　（倒れる）
白石　木崎君！
木崎　（聞かず）おめえ、いいかげんにしろよな、小林さんがどういう気持ちでこれ作ったかわかってんのかよ！（と、蹴る）

小林　（駆け寄り）おまえ！

木崎　なんでそんなに頭が悪いんだよ！（蹴る）　なんでそんなに頭が悪いんだよ！（蹴る）　おまえは！（蹴る）　おまえはっ！（蹴る）　どうしてそんなに頭が悪いんだよおっっっ！（幾度も幾度も蹴る）

小林　（木崎を引き離す）

木崎　（ベッドの上に倒れる）

白石　（新井に駆け寄る）

新井　（虫の息）

白石　……病院連れてった方がいいんじゃないですか？

小林　……じゃあ、俺が、

白石　いえ、わたしがタクシーで連れて行きます、

小林　でも、

白石　その方がいいですから、

小林　いや、でも、

白石　だいじょぶですから、

小林　でもそれじゃ、

白石　（怒鳴り）あなたが行って何になるんです！？　ぼくの恋人の男の子がこの人を袋だたきにしたんですって言うんですか！？

小林　……。

木崎　（ベッドに仰向けに寝たまま）……。

白石　中途半端な責任感は捨ててください。

小林　……。

白石　それじゃあ、わたし行って（来ますから）……。

白石の言葉をさえぎるように、突如新井がむっくり立ち上がる。

ひどい顔である。

白石・小林　――。

新井　……。（と、誰も、どこも見ずに、ふらふらと玄関の方へ歩いていく）

白石・小林　（ただ見ている）

新井　（ふいに思いついたように立ち止まり、木崎を振り帰って）そんな無理しないでいいからね。

木崎　（微動だにせず）……。

新井　わたしはだいじょぶだから。

木崎　……。

新井　すぐに助けてあげるから。

新井、ふらふらと玄関に立ち、後は振り返らず、なにも言わず、出ていく。

白石　……見てきます。（と、玄関へ）

小林　（一瞬、自分がと言おうとするが、思いとどまり）……お願いします。

白石　……。（出て行く）

小林　（見ている）……。

小林と木崎。

小林、すわる。どっと疲れている。

やがて、

木崎　なんかうまくいかねえんだよな。
小林　……。
木崎　なんでみんな俺みたいにやれないのかな。
小林　……。
木崎　なんで俺みたいな奴にもできることが、できねえのかな。
小林　……。
木崎　わかんねえよ、小林さん。
小林　……。
木崎　ああ、めんどくせえ！（寝返りを打ち、ベッドを激しく叩く）
小林　……めんどくせえよ。たぶん一生めんどくせえよ。しょうがねえよ、そういうもんなんだ。
木崎　（半身を起こし）小林さんは、それでいいの？
小林　よくねえよ。でも、しょうがないと思ってる。
木崎　それが大人？
小林　……。
木崎　俺は嫌だな。
小林　じゃあ、どうすんだ。
木崎　わかんねえけど。
小林　俺だってわかんねえよ。だからしょうがねえんだ。
木崎　……。
小林　人の数だけ人間関係があるんだろ。だったらバカとも関係を築けよ。選り好みするな。
木崎　……。
小林　俺はおまえみたいに誰彼かまわず関係を築きたいとは思わない。友だちなんて二三人でいい。いいや、もっとはっきり、正直言って、おまえだけいればそれでいい。
木崎　……。

小林　俺は女と寝たいと思わない。他の男と寝たいとも思わない。おまえと寝たい。おまえとだけ寝たい。おまえとだけセックスできればそれで満足なんだ。

木崎　……。

小林　俺は、なんでおまえが、俺みたいに俺のことを愛してくれないのかわからない。わからないが、それがおまえなんだ。だから、それなりに不満だったけど、おまえの生活は黙って認めてきた。好きにさせてきた。けどな、最近疲れてきた。なんか、もう、どうでもよくなってきた。

木崎　……どういうこと？

小林　わからない。とにかく、俺もめんどくせえんだ。

木崎　俺のこと、好きじゃなくなった？

小林　……たぶん、そうじゃないと思う。

木崎　たぶん？

小林　ああ。たぶん。

木崎　（また仰向けに寝て）やっぱり、わかんねえよ。めんどくせえや。

小林　（微苦笑）

しばらくじっと木崎の姿を見ている小林。

木崎　（その姿勢のまま、眠そうにぽつりと）俺の気持ちは本当なんだけどな。

小林　……。

木崎　小林さん、信じてる？

小林、答えられない。

小林　……ほんとに食べないのか？　ちょっと冷めちゃったけど。
木崎　（答えないのか、寝ているのか）……。
小林　……（テーブルの上のありさまを見て）なんか、無駄んなっちゃったな。

小林、立ち上がり、テーブルの上を片付ける。

そして、席に着くと、自分の分を食べはじめる。

ひたすら食べる。

木崎は仰向けのまま、起きているのか、寝てしまったのか――。

小林、ひとり冷めたカレーを食べている。

ただ食べているだけの小林。

やがて場内はゆっくりと闇に落ちていく。

（了）